

1. 活動期間

2024年9月29日(日)9時00分～17時00分

2024年10月1日(火)9時00分～10月3日(木)14時00分

2. 活動場所

大谷小中学校避難所

3. 石川県珠洲市の被害状況

(第161報 令和6年9月24日14時00分現在:石川県庁,危機管理室)

人的被害 死者:126人 うち災害関連死:29人 負傷者:重傷47人、軽傷202人

住家被害 建物全壊・半壊・一部破損:5,543棟、非住家被害:5,985棟

避難所開設数:15箇所 避難者数145人

通水率:4,252戸/4,585戸(92.7%)

4. 令和6年奥能登豪雨による被害等の状況

(第16報 令和6年10月4日(金)15時00分現在:石川県庁,危機管理室)

人的被害:死者14名(珠洲市3名) 安否不明者1名 重症者2名 軽症者45名

全壊3棟 床上浸水10棟(*珠洲市・輪島市調査中)

床下浸水137棟(*珠洲市・輪島市調査中)

避難所開設:珠洲市11箇所 避難者数67人

5. 大谷地区避難者状況

・大谷地区在宅に住まれている方133世帯202名

・大谷小中学校避難所避難者数

9月29日33名

9月30日33名

10月1日32名

10月2日32名+3名(雨天による一時避難者)

10月3日32名+6名(雨天による一時避難者)*14時現在

6. 支援活動の実際

【避難所】

#)被災者支援#*

・避難者日中在住の方の健康状態ヒアリング、被害状況の確認と道路状況の確認

・バイタルサイン測定、健康調査・相談の実施

ヒアリングした方はかかりつけ医での受診もできているが内服のコンプライアンスは不安定の方もいる。一人次回受診予定の移手段はあるが受診後の帰りの移手段がなく受診日の変更を

されたとのこと。(内服は受診変更日まではあり)降圧薬内服中の男性数人は自己で血圧測定を行い手帳に記載している。

#) 環境整備#*

- ・10月1日より感染防止のため手指消毒推奨のチラシを掲示し、朝、夕にドアノブなど手に触れる箇所の拭きとりを行った。また食事前の手指消毒の徹底のため案内をランチルームに貼りディスプレイ濡れタオルを設置した。タオルが大量に届いているため、ハイターを希釈しふき取り用に使用した。使用後のタオルは破棄することにした。(*環境クロスなどの拭き取り用のものを請求済み)
- ・10月2・3日に分け、体育館内ブルーシートの交換(避難所運営本部のブルーシート以外)と床の清掃を実施。10月2日14時過ぎに段ボールベッド20個が届いたため、交換する方の聞き取り調査を実施。4名の方の段ボールベッドを交換した。

#) 支援物資の整理#*

- ・支援物資が毎日のように届けられていたため物資の整理が追い付かず保管庫に入りきらないものは廊下にそのまま置いてある状況となっていた。また衣類などは体育館に置かれたままであり、避難所利用者以外は持ち出せず在庫が残ったままであった。そこで避難所に支援に入られている行政職と協働し物資の整理を行った。廊下にある物資は、生活用品、衛生用品、食料、飲料水と区別し並びなおした。各物資には商品名を貼り分かりやすいよう提示した。体育館の衣類は廊下に並べなおし、避難所に来られた在宅避難者にもわかるように設置した。(写真1)

【在宅避難者訪問】

9月30日 在宅訪問4件中2件

10月1日 在宅訪問3件

在宅避難者は、支援物資の調達はできており、生活用水は山水を使用する方もいた。

自家用車もあり、かかりつけ医には受診可能。1名、粉塵による喘息発作が出現した方がいたが、処方薬の吸入にて症状は落ち着かれていた。

今後としては、家の裏山が崩れている方もあり、2次災害の危険性も感じつつ自宅で過ごされている。地域外への避難も検討される中、在宅の方々がどのような決断をされるのか喫緊の課題でもある。

【大谷地区地域視察】(9月29日、10月1・2日)

大谷町へのアクセスは249号線大谷峠を通るルートが通行可能であり、新道・旧道を交差しながら、上り下りを走るルートである。さらに道路の崩落や、雨天時はスリップや泥水が流出するため運転時には最新の注意が必要である。

地震後に通行可能となっていた若山町から大谷への上黒丸線の通行は可能であるが、大谷地区の入り口手前の道路が陥没・崩落してしまいアクセスできない状況である。(写真2)その為、地震後に整備された仮道路は通行不可となり、川沿い反対側のあぜ道を仮道路として整備中である。しかし雨天時などは泥がぬかるむため、自家用車では四駆または軽トラックであれば通行可能な状況である。また、復旧作業などの状況により時間的通行止めの箇所があるため、随時道路情報の確認と共有が必要である。沿岸部道路の高屋地区や仁江地区までの通行は可能であるが除雪作業状態であり、道路両サイドに土砂が積まれている状況となっていた。雨天によっては道路上に泥水の貯留や流水箇所がある。(写真3)

大規模な土砂災害の被害を受けた住宅周囲は未だ土砂が山積している状態である。重機が入っているが道路の復旧が優先されている。住民は晴天時などに自宅2階の屋根から入り、必要なものを取り出しているが、1階に土砂が入っているため、保険証など他、重要書類は取り出せない方もいる。

7. 支援活動を通しての所感と課題

豪雨災害後であり重機や車が通るたびに粉塵が舞うため、支援者もゴーグルやマスク着用など対策は必須である。今後咽頭痛や呼吸器症状の出現する被災者が増える懸念があり、粉塵の吸い込み予防策や加湿について被災者と共有し、注意喚起を行っていく必要がある。

被災者へのヒアリングでは、迫り来る危険や被害の甚大さについてお話される方と、寡黙にあまり話しをされない方、健康調査自体に拒否的な言葉がみられた方、内服薬を把握しセルフケアされている方など、様々な方がいる中で、それぞれにあったタイミングで必要な声かけや観察が必要であると感じた。また支援されることへの疲労感を話されていた方もおられ、被災者が負担にならない関わりの中で健康観察、ケアを行っていく必要がある。更に、震災後に外部の支援者から確実性のない約束をされ準備を行なったがキャンセルとなるなど、責任感のない言葉かけで何度か落胆されたケースがあった話も伺った。支援中での自身の言動に責任を持ち対応・支援が必要である。

今回の支援では豪雨災害から約1週間が経過したころでもあり、避難所運営人や避難所利用者、在宅避難者共に疲労感が感じ取れる状況であった。地域外全避難を考慮に悩まれている方、避難したくないという思い、このまま見捨てられる（大谷地区）のではないかという思いなど複雑な心境がうかがえた。環境問題や影響される健康問題など課題もあるが、復興に向けての取り組みのさなかに、地震に続き豪雨災害に見舞われ町の形を失った代償は大きく精神的ケアが重要であると感じた。再び復興・自立に向けて立ち上げられるには時間を要するが、迫る冬季でのアクセス問題や再び土砂災害の危険もあり落ち着いた状況が続くと思われる。今後の生活に向けて最善の選択ができるよう住民に寄り添った支援を継続していく必要がある。



写真1



写真2



写真3